

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2 0 2 5 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	スポーツウエルネス学研究科	スポーツウエルネス学専攻
研究代表者 (2026 年 3 月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏 名	
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 2 年	八木一弥	
指導教員	所属部局・職名	氏 名	
	スポーツウエルネス学部・教授	松尾哲矢	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	日本の野球文化形成の萌芽に関する研究:明治時代における「野球害毒論争」に着目して		
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026 年 3 月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏 名	
研究期間	2 0 2 5 年度		
研究経費 (1 円単位)	(支出金額) 95,873 円 / (採択金額) 100,000 円		

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。
本研究は、1911 年の「野球害毒論争」を日本における野球文化形成の契機として捉え、その展開過程を明らかにすることを目的とした。N.エリアスの関係態社会学の視点を参照し、「読売新聞」や押川春浪といったアクター間の相互作用に着目して、新聞・雑誌等の言説資料を分析した。その結果、本論争は単なる賛否の対立ではなく、野球を社会的に再定位する契機であり、「教育」という多義的概念のもとでその意味が再編成されていたことが明らかとなった。さらに、娯楽としての野球は否定されるのではなく、管理や規律と結びつくことで正当化されていたことが示唆された。
キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)
[野球文化] [教育概念の多義性] [歴史社会学]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
 - ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
- 自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

■ 研究背景

日本に野球が導入されてから約 40 年後の 1911 年、新渡戸稲造による批判を契機として「野球害毒論争」が展開された。この論争は新聞紙面を中心に拡大し、教育者や行政関係者を巻き込みながら学生野球のあり方をめぐる社会的議論へと発展した。先行研究は、この論争が野球の担い手たちの理念や結束を形成し、野球文化の方向性を規定する契機であったことを指摘している。しかし、こうした諸要素が相互に作用する中で、野球文化がどのような過程を経て位置づけられていったのかについては、十分に明らかにされていない。本研究はこの点に着目した。

■ 先行研究の検討と目的

先行研究では、「野球害毒論争」の背景として、教育制度、思想的潮流、メディア戦略など複数の要因が関与していたことが明らかにされてきた。また、本論争は日本におけるスポーツ文化形成の契機として再評価されている。しかし、これらの諸要素が相互に作用する中で、本論争が野球文化の形成過程においてどのような意味をもち、その方向性をいかに規定したのかについては、十分に検討されていない。さらに、論争以前に存在した「武士的野球」論を中心とする野球観についても、その共有範囲や社会的広がりには明らかではない。

そこで本研究は、「野球害毒論争」を野球文化形成の一契機として捉え、新聞社間の論争の展開とそれに応答する野球界側の主張に着目し、それらが社会状況や制度との関係の中でいかに展開されたのかを分析することを通して、野球文化がどのように方向づけられていったのかを明らかにすることを目的とした。また、本論争以前に共有されていた野球観の広がりについても併せて検討した。

■ 方法

本研究では、「野球害毒論争」を野球文化形成の過程における一契機として捉え、そのダイナミズムを明らかにするため、N. エリアスの関係態社会学の視点を参照した。個人構造と社会構造を相互依存的かつ動的な過程として捉えることで、本論争を教育制度や思想的潮流、メディア戦略といった諸要素が交錯する場として位置づけた。

その上で、新聞社間の論争の展開とそれに応答する野球界側の言説や行為に着目し、複数のアクターの相互作用の過程を分析することで、野球文化がいかに方向づけられていったのかを検討した。分析対象は、「野球害毒論争」に関与した東京朝日新聞、東京日日新聞、読売新聞およびその関係者とし、とりわけ押川春浪と読売新聞の動きに着目した。

調査にあたっては、「野球害毒論争」に関わる新聞記事および関連資料を中心に収集し、記事の掲載順序や論者間の応答関係を時系列的に整理した。また、各新聞社の社史や関連雑誌、関係者の著作を参照し、アクター間の関係性についても検討した。資料の対象期間は 1911 年前後を中心としつつ、明治期全体の資料も補助的に参照した。資料収集には、ヨミダス、朝日新聞クロスサーチ、毎索等のデータベースを利用するとともに、国立国会図書館および野球殿堂博物館図書室にて調査を行った。

■ 調査結果と考察

本研究の結果、1911 年の「野球害毒論争」は、単なる野球の賛否をめぐる応酬ではなく、野球を社会的に議論される対象として再定位させる契機であったことが明らかとなった。論争以前の野球は、主として選手や指導者などの「担い手」内部で語られる文化として展開されており、その価値は自己規律や精神性を中心とする内部規範によって支えられていた。押川春浪が提示した「武士的野球」論はその典型であり、この段階では野球の正統性は内部文化の中で確認されていた。

しかし、新聞社間の競争や読者層の拡大といった状況のもとで、「野球害毒論争」は新聞紙面を舞台に社会化されていった。東京朝日新聞、東京日日新聞、読売新聞の三紙はそれぞれ異なる立場から論争に関与し、野球否定論、対抗的擁護論、中間的立場といった言説の分化が生じた。これらは単なる思想の違いではなく、販売戦略や編集方針、人的ネットワークなどが相互に作用する中で形成されたものであった。

また、論争の展開においては、野球そのものへの批判と選手の品行、教育者の責任といった論点が交錯しつつも、読売新聞主催の野球問題大演説会を契機として、議論は紙面外へと拡張された。この過程において、野球は社会に対してその意義を説明し、正当化することを求められる対象へと変化していった。とりわけ押川春浪の語り、論争以前の内部規範の確認から、論争期における外部批判への応答、さらに演説会以後には社会や国家と結び

研究成果の概要（つづき）

つけた正当化の語りへと変化していた。このことは、野球界の価値観が失われたのではなく、社会的承認を得るために再編成されていたことを示している。

さらに、本研究からは、野球が「教育」という枠組みの中で評価される対象へと位置づけ直されていたことが明らかとなった。ここでいう教育は、身体強健、精神修養、共同一致、娯楽、規律、管理など多義的な意味を含んでいたが、野球を教育に照らして評価する枠組み自体は共有されていた。娯楽としての野球は否定されるのではなく、教育的効果をもつものとして再定義され、その正当性は管理や規律と結びつく形で語られていた。

したがって、「野球害毒論争」は、教育、団体性、娯楽、管理といった諸契機を相互に結びつけながら、野球文化の方向性を形成していく過程として位置づけることができる。このような過程は、特定の主体の意図や理念によって一方向的に形成されたものではなく、複数のアクターが相互に依存しながら関係を取り結ぶ中で、結果として一定の方向へと収斂していったものとして理解されるべきである。すなわち、「野球害毒論争」においてみられた言説の展開は、個々の行為主体の意図を超えて形成される関係構造の産物であり、その過程において野球の意味や価値が再編成されていたといえる。この点において、本論争は単なる歴史的事件ではなく、文化が固定的に存在するのではなく、相互作用の中で生成され続けるものであることを示す具体的事例として位置づけることができる。

また、本研究の意義は、「野球害毒論争」を単なる歴史の出来事としてではなく、野球文化が形成されていく過程そのものとして捉え直した点にある。従来の研究では、本論争は教育的弊害の有無やメディア間の対立として整理されることが多く、その歴史的意義についても結果論的に評価される傾向があった。しかし本研究では、論争を複数のアクターが相互に影響を及ぼし合いながら展開していく過程として分析することで、文化がいかになに生成され、方向づけられていくのかという動態的な側面に光を当てた。とりわけ、新聞社間の言説の応答関係や、押川春浪の語りの変化に着目することで、野球の意味が固定的に存在していたのではなく、論争の中で再構成されていたことを示した点に本研究の特徴がある。すなわち、野球文化とは相互依存関係の中で形成されていくプロセスとして理解されるべきものである。

本研究は、野球が「教育」という枠組みの中で位置づけられていく過程を明らかにしたことにより、現代の日本における野球文化のあり方を理解する上でも示唆を与えるものである。すなわち、野球が教育的価値と結びつけられ、その正当性が管理や規律とともに語られてきた歴史的過程を踏まえることで、今日指摘されている指導の抑圧性や主体性の欠如といった問題を、単なる現代的課題としてではなく、歴史的に形成されてきた文化的構造の延長として捉える視座を提供する。以上のように、本研究は、「野球害毒論争」を通じて野球文化形成のダイナミズムを明らかにし、その歴史的形成過程を捉える視座を提示するものである。

■当該研究は何をどこまで明らかにできたのか（できなかったのか）

本研究では、「野球害毒論争」を通じて、野球が担い手内部の文化から社会的に議論される対象へと転換し、「教育」という多義的枠組みのもとで位置づけ直されていく過程を明らかにした。とりわけ、新聞社間の論争構造、押川春浪の語りの変化、教育・団体性・娯楽・管理といった諸要素の結びつきを示した点に本研究の成果がある。

一方で、本研究は主として新聞資料に依拠しているため、当時の実践現場における受容や、その後の制度化過程との連続性については十分に明らかにできていない。

■何をもって研究成果（経過）を達成できた（できなかった）と考えられるのか

本研究の目的は、「野球害毒論争」を野球文化形成の契機として捉え、その展開を通じて野球文化がどのように方向づけられていったのかを明らかにすることであった。本研究では、三紙の新聞記事を中心に関連資料を収集し、論争の時系列的展開とアクター間の応答関係を分析することにより、論争構造の把握と野球の意味の再編成過程を示すことができた。

以上の点から、本研究は当初の目的に対して概ね達成されたと評価できる。一方で、資料的制約から、論争後の展開や実践レベルでの影響については十分に検討できておらず、この点は今後の課題として残されている。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※ 修士論文・博士論文は含みません。

④ 学会発表

Kazuya Yagi・Tetsuya Matsuo (2025) A Study on the Budding of Baseball Culture in Japan : Focusing on the Controversy about “Toxic Effects of Baseball” in Meiji era
(2025 World Congress of Sociology of Sport, 2025 年 7 月 8 日 -11 日, ソウル大学 : 韓国.)